

# 伊那谷スケッチ

～自然と文化を巡るふるさと再発見～ 第三十四回

前島久美

## 大鹿村のイヌワシ



年の瀬の28日くらいから3日まで、私は自分でもびっくりするほどとても元気だった。リニアの工事が行なわれていないからだ。大鹿村では日曜日以外は、ずっと工事が行なわれていて、村道を走ればダンプ等の大型車両をはじめ黄色のステッカー（リニア工事車両に貼る事が義務づけられている）を付けた関連工事の車両に必ず行き会う。迂回ルートの整備のため、川底の整備も始まっていて自宅がある上蔵から大河原の中心地におりていけば、どこかで

重機が動き、音をたてている。オオシカ谷において五感の平安が奪われた状態がもはや日常となっている。工事が休みの毎週日曜は唯一ほっとするが、翌日にはまた工事が始まることを思うと日曜日がずっと続けばいいのにと、叶わぬ事を思ってしまう。2016年11月の着工以降、気持ちが休まらない村の生活が続いている。

免許の書き換えに飯田市まで出かけた際に、阿智村のMさんに声を掛けられた。「阿智村ではまだ始まっていないからいいけど、工事の始まった村での生活は大変でしょう」Mさんとは初対面だったが、阿智村でも山間の清内路という地区で暮らし、リニア工事に不安を抱いている住民の1人という事は知っていた。大鹿村で起っている事がだんだんと、この伊那谷の日常になっていく事を思うと心臓がぎゅっと痛んだ。

## イヌワシ体験記

2017年12月、クライマーのNさんに誘われてオオシカ谷のイヌワシに会いに出かけた。Nさんは20年来、厳冬期の大鹿村を訪れてはアイスクライミングを楽しんでいる。Nさんのイヌワシ体験は深山の滝と戯れ下山途中、偶然の出来事だったと言う。私はと言えば父が野鳥好きだったので小学・中学生の頃、冬となれば、温かいお茶とおにぎりを持たせてもらって一緒に

イヌワシ観察に出かけていた。結局、当時父と一緒に出かけた時はイヌワシは姿を見せてはくれなかったと思う。けれど冬とはいえ、お日様が照らしてくれる日中は暖かく快適で、山の斜面で落ち葉の上に寝ころがって青空を眺めて過ごしたのは貴重な時間だった。父は2000年前後にそのスポットでイヌワシを確認して以来、観察を継続している。

今回Nさんが連れてってくれた所も父と共に足を運んだ場所だった。観察スポットをうろう

ろしながら、角度を変えつつ山の際と空の境目をなめるように双眼鏡を覗き込んだ。谷間の底でずっと空を見上げるのは首に負担がかかる。私は早々に首が疲れて、暖かいお茶とおやつに興じているとワシウオッチャー歴の長いNさんは目敏く見つけたシルエットをフィールドスコープで更に確認し、以外に呆気なくイヌワシと思われる個体を1羽発見。覗かせてもらおうと顔をきょろきょろ動かしながら辺りを確認しているかのような動きが見て取れた。あとは飛べば同定できる！ということで飛び立つのを今か今かと眺めていた。その時、私たちのすぐ後ろでもう1羽が低空飛行で登場。一瞬の出来事だった。彼女はみるみる上昇気流に乗り、いつの間にか2羽で大空を求愛飛行していた。稜線付近にいたのが雄、私たちを後ろから偵察するように低空飛行したのがメスだった。まさかこんなに簡単に姿を見せてくれるとは。つがいの飛翔を見た事は忘れられない思い出になった。

メスの個体は羽に白さが残るのでまだ幼鳥なのだろうかと思い、帰宅してから父に話すと数年前からメスの個体は新しく変わっているようで、若いと言えば若いのだそう。ただここ10年近くは子育てしている様子が観察できていないと父は話す。

## イヌワシ減少の背景

「風の精」ともいわれるイヌワシは、北半球の高緯度地域に広く分布する大型で勇壮な猛禽で、現在のところ世界では6亜種が認められているが、その内、最も小型で地理的に極めて局地的に分布し、個体数が少ないのが日本に生息する亜種ニホンイヌワシだそう。

イヌワシはとてもデリケートな動物と聞くのでリニアの工事が大鹿のイヌワシの生息を脅かす一つの要因になる事は想像がつく。けれど、それだけではないリニア以前の要因も目に付く。オオシカ谷に住むイヌワシは岩壁の木の上に営巣している。かつて、彼らは餌をとる時に人間の作った環境を利用していた。例えば炭焼きの生産や材木の搬出などの伐採地、焼き畑、

採草地は彼らにとっては絶好の狩り場だった。見通しの効く場所は獲物を捉えやすいからだ。しかし、人の生活は50年前と比較してみても大きく変わった。人は山で木を切る事も草を刈る事もすっかりしなくなった。化石燃料が木炭燃料と打って変わる1949年頃からイヌワシの減少は著しくなったと言われている。手つかずの自然と人間の暮らしとのせめぎ合いのバランスの中で、イヌワシが営巣できるちょうど良い環境が整っていたということだ。

## オオシカ谷のイヌワシの事情

現在のオオシカ谷のイヌワシ食料事情を聞けば、アオダイショウなどの蛇を捕獲するのがメインでウサギを捕る事は稀だという。ここに暮らすイヌワシの特徴は「猟師」に着いていることだ。彼らは猟師と一緒にいれば獲物にありつける確立が上がる事を知っている。子鹿であれば崖まで追いつめ、落として食べる、もしくは猟犬に追わせておいてちょうどいいタイミングで横取りを狙うという。オオシカ谷のイヌワシは賢く、生きる為の手段を柔軟に身につけて来たらしい。

気になるのはどうして子育てが成り立っていないのかだ。以前と比べ狩りが大変になってしまったからなのか、それとももっと別の要因があるのか…もし、イヌワシが消失する事があるとなれば、その背景にはリニア以前に「人の生活スタイルの変化に伴う環境の変化」があることを留めつつ、そこにリニア工事がどのようなインパクトとして加わるのかを注視する必要がある。

「イヌワシ」を漢字にあてると「狗鷲」とも書く。飛翔の印象が天狗に似ていることからこの字があてられたのだろうか。奇しくも大鹿のイヌワシが営巣している周辺には3人天狗の言い伝えもあるから興味深い。言い伝えでは、彼らは「文明の力（例えば猟銃など）を嫌う」とされ、天狗様のテリトリーにそれを持ち込むと祟りがあると言われている。